

琉球新報 2018.05.29 琉球新報朝刊 27頁 社会 1版 写図表有 (全1,230字)

今帰仁村の百按司（むむじゃな）墓から1929年、京都帝国大学（現在の京都大学）助教授だった金関丈夫氏が持ち出した琉球人の遺骨が返還されていない問題で、持ち出された遺骨は少なくとも男女の全身骨50体で、当時の京都帝大側が遺骨の返還に応じる意向を示していたことが28日、分かった。29年1月26日付の「琉球新報」に記事が掲載されていた。仲村顕県立芸術大学付属研究所共同研究員が、県公文書館で確認した。

昭和初期の新聞は沖縄戦などで多くが散逸し、29年の紙面は現在の琉球新報にも残っていない。琉球人遺骨の記事は「京大人類学科の一角に／骸骨の琉球人部落出現」の見出しで報じられている。京都帝大が「琉球人研究」を「数年前」に始め、沖縄に「新進の人類学者金関教授を特派」したことを伝えている。

遺骨について「琉球人の全身骨五十人分が嚴重に、荷造りされて京大の人類学教室に送られた」としている。収集に関しては「各地から極めて合法的に集められた」と書かれている。合法的とする根拠は「市町村長の了解」を挙げている。

返還については「無縁塚から救い上げられた無縁仏も居り、引取人があれば、何時でも京都から『御返り遊ばず』様な仕掛になってゐる」とある。「引取人」がどんな人を指すのか、返還を明言した人物が誰なのかについては記述がない。

記事の事実関係について琉球新報は28日、京都大学に質問したが、同日午後5時までに回答はない。  
(宮城隆尋)

#### 研究に「奉仕」喜ぶ／当時の記事 京大へおもねる論調

沖縄から持ち出された遺骨について「琉球新報」は「骸骨の琉球人部落出現」「一行五十名ぞろぞろ連れ立って／學界（がっかい）への奉仕」など見出しを付けるなど、旧帝国大学の研究におもねる論調で記事にしている。遺骨は日本の植民地主義を学問の分野から支える形質人類学の標本として使われたが、記事は喜ばしい話題として位置づけている。

研究の意義を「東大を向（むこう）に廻（まわ）しての太刀打ちだけに、金関氏は、参考品の蒐集（しゅうしゅう）に、狂奔し中央學界を震駭（しんがい）せしむる様な珍奇な物を相當（そうとう）に持ち返つた」と研究者の視点から書いている。研究成果を地元に戻すという視点は見られない。

ほかにも「引取人（ひきとりにん）があれば何時でも京都から『御返（おかえ）り遊ばず』」といった軽薄な書きぶりがある一方、遺骨の持ち出しに対する遺族の意向についての記述はない。「京大教室の一角に築かれる骸骨の琉球人部落は、當分大賑（とうぶんおおにぎわ）ひを呈することであらう。殊（こ）とに、無縁塚のべんべん草の下に淡い夢を見てゐた骸骨にとつては、學界の為に奉仕しつつ、鄭重（ていちょう）に取扱（とりあつか）はれ（る）だけでも、冥加（みょうが）であらう」とも書かれている。

当時は「富国強兵」を国家目標に掲げた近代日本が軍国主義化していく時代だった。